北宋中期における杜詩の受容について

湯浅陽子

【要旨】

盛唐期の杜甫（七一二～七七〇）の現在伝わっている詩文テクストは、晩唐・五代の時期に一旦かなりの部分が散佚し、北宋期に再編集されたものである。杜甫詩はその後、北宋後期の黄庭堅及び江西詩派において詩作の規範となるに至るが、ここでは、杜甫詩の再編集が進められ、評価が確立されていく仁宗期を中心とした時期の受容の様相を検討する。

五代後晉期の『舊唐書』文苑傳下所収の杜甫の伝記は、杜甫詩を高く評価した中唐期の元稹「唐故工部員外郎杜君墓係銘」序を引用しており、当時においても杜甫とその詩作への評価は決して低くなかったことを示している。また続く北宋初期には、王禹偁が杜甫詩を高く評価したが、孤立した例にとどまり、未だ大きな流れを形成するには至らない。

北宋中期には文人官僚たちの間で杜甫詩が日常的に読まれており、杜甫を古今随一の詩人とする位置づけも、すでにかなり安定している。また、生前の苦労・唐朝への忠誠・人民の福利への関心・天地の機微に迫る詩作と等の、後世にまで継承される杜詩に対する基本的な捉え方もほぼ出揃っていると思われる。

杜甫詩を、詩という形式を用いた歴史の記録という意味で「詩史」と呼ぶことがあるが、杜甫詩を唐代の史実を知る資料として用いた例は、仁宗期を中心とした時期の筆記小説などに多く指摘することができ、このような例が増加していくなかで「詩史」という捉え方が次第に固まったと思われ、その背景には、杜甫詩テクストに対する考証の精密化、また読み手の側の歴史への感心の強さが存在している。

北宋仁宋期を中心とした時期に王洙らによって杜甫詩のテクストが再編集された際、より精確なテクストを求めて各テクスト間の校勘や表現の典拠等の検討が進められる過程で、その検討の内容や資料の記録が徐々に蓄積され、次第に注釈化していったと考えられる。

はじめに

盛唐期の杜甫（七一二～七七〇）が、その生前においてはその詩作を評価されなかったということは、比較的よく知られているだろう。彼の没後における評価の高まりを示す資料として、しばしば取り上げられるのが、次にその一部分を掲げる、中唐期の元稹（七七九～八三一）の「唐故工部員外郎杜君墓係銘」序（元稹集巻五十六　中華書局　一九八二年）である。

至於子美、蓋所謂上薄風騷、下該沈宋、古傍蘇李、氣奪曹劉、掩顔謝之孤高、雜徐庾之流麗、盡得古今之體勢、而兼人人之所獨專矣。子美に至りては、蓋し所謂　上は風雅に薄り、下は沈宋に該ね、古きは蘇李に傍ひ、氣は曹劉を奪ひ、顔謝の孤高を掩ひ、徐庾の流麗を雜へ、盡く古今の體勢を得、而して人人の獨り專らにする所を兼ぬ。

ここで元稹は、それまでの詩の歴史を集大成する存在として杜甫を位置づけ、非常に高く評価しているのだが、同じような位置づけと評価は、

例えば蘇軾（一〇三六～一一〇一）「書呉道子畫後」（東坡集巻二十三古典研究會叢書16　汲古書院　一九九一年）の「智者創物、能者述焉、非一人而成也。君子之於學、百工之於技、自三代歴漢至唐而備矣。故詩至於杜子美、文至於韓退之、書至於顔魯公、畫至於呉道子、而古今之變、天下之能事畢矣。」（智者は物を創り、能者は焉れを述ぶ、一人にして成るに非ざるなり。君子の學に於けるや、百工の技に於けるや、三代より漢を歴て唐に至りて備はれり。故に詩は杜子美に至りて、文は韓退之に至りて、書は顔魯公に至りて、畫は呉道子に至りて、古今の變、天下の能事は畢れり。）に見られるように、北宋中・後期以降の人々にも継承され、さらに黄庭堅及び江西詩派以降においては、杜詩は詩作における規範としての位置を確立するに至る。

しかし、これも広く知られているように、現在伝わっている杜甫の詩文テクストは、元稹から蘇軾に至るまでの間の時期において、一旦かなりの部分が散佚し、その後に再発見・再編集されたものである。では、この間の再発見・再編集が進められた時期において、杜甫詩はどのように受容され、評価されたのだろうか。この時期に杜甫詩が次第に広く愛好されるようになり、その評価が高まっていったのだろうということは、漠然と想像されるが、具体的にそれがどのような状況であったのかということについては、明らかにされていない部分も多いのではないだろうか。杜甫詩が後世において詩作の規範となるに至ることを思えば、その評価が上昇していくこの時期における受容の様相をより丁寧に把握しておくことは、必要でこそあれ、不要ではないだろう。そこで以下では、杜甫詩の再編集が進められた北宋中期、特に仁宗期を主な対象として、当時における杜詩の受容の様相についていくつかの側面から検討してみたい。

一　北宋初期における杜甫詩の評価

北宋中期の状況について検討する前に、まず、それ以前の状況を整理しておく必要があるだろう。北宋の成立以前、五代後晉期（九三六～九四六）に編纂された『舊唐書』巻一百九十下文苑傳下（中華書局本）は、既に杜甫の傳を収めているが、そこでは上述の元稹の「唐故工部員外郎杜君墓係銘」序を「李・杜之優劣」を論じるものとして引用し、直後に「自後屬文者、以稹論爲是。」（自後の文を屬る者、稹の論を以て是と爲す。）と記している。ここからは、五代後晉期においても元稹による高評は支持され、杜甫とその詩作への評価は決して低くなかったことが窺われる。

続く北宋初期においては、杜甫を高く評価した人物として王禹偁（九五四～一〇〇一）を挙げることができる。王禹偁は白居易の詩風を好んだ、所謂「白体」の詩人として知られているが、別集『小畜集』巻九（四部叢刊本）には、次のような長い題を持つ詩を収めている。

前賦春居雜興詩二首、間半歳不復省視。因長男嘉祐讀杜工部集、見語意頗有相類者、咨于予、且意予竊之也、予喜而作詩、聊以自賀。

前に春居雜興詩二首を賦し、半歳を間（へだ）つるに復た省視せず。因（ちな）みに長男嘉祐　杜工部集を讀み、語意の頗る相ひ類する者有るを見、予に咨（と）ふに、且に予の之を竊めりと意ふなりと、予　喜びて詩を作り、聊か以て自ら賀す。

『杜工部集』を読んだ息子は、そのなかの詩句に半年前に父が制作した詩と語意の似ているものを見つけて、父が杜甫の詩を盗んだのだのではないかと訝り、これを問うたという。ここで王禹偁の息子が『杜工部

集』を読んでいること、また杜甫の詩からの剽窃をあり得るものとして考えていることからは、北宋初期の知識人たちの家庭ですでに杜甫詩が丁寧に読まれ、詩作の参考や手本となっていた状況を捉えることができるだろう。

またこのような題を持った詩が制作されていること自体、息子のこの指摘を聞いた王禹偁がこれを遺憾に思わず、むしろ嬉しく感じていることを窺わせるが、さらに詩の本文で王禹偁は次のように述べている。

命屈由來道日新　命は屈し　由來　道は日びに新たなり
詩家權柄敵陶鈞　詩家の權柄　陶鈞に敵ふ
任無功業調金鼎　功業の金鼎を調ふる無きに任へ
且有篇章到古人　且つ篇章の古人に到る有り
本與樂天爲後進　本と樂天の與(ため)に後進と爲り
（自注：予自謫居、多看白公詩。（自注：予謫居せられしより、多く白公の詩を看る。））
敢期子美是前身　敢へて期す　子美は是れ前身なりと
從今莫厭閑官職　今よりは厭ふ莫し　閑官職を
主管風騷勝要津　風騷を主管するは要津に勝れり

左遷中の王禹偁は、天命の行き詰まりを感じて新しい「道」を模索している。閑職にありながら自分を生かす道として詩作に没頭した人物として、彼は白居易を想起し、自注でも、左遷中に白居易詩を多く読んだと述べている。ところが息子は意外にも、彼の詩が杜甫の詩に似ていて、さらには剽窃ではないかとさえ言うのである。しかし、王禹偁はこの指摘を不快としない。このような表現は彼の杜甫詩に対する高い評価を示しているだろう。

また、王禹偁の詩にはこの他にも杜甫詩に言及するものがあるが、それらはいずれもある種の気分を伴っている。その一例を挙げてみよう。

未得科名鬢已衰　未だ科名を得ざるに鬢は已に衰へ
年年顛悴在京師　年年　顛悴して　京師に在り
妻裝秋卷停燈坐　妻は秋卷を裝ひて燈を停して坐し
兒趁朝餐乞米炊　兒は朝餐に趁りて米を乞ひて炊ぐ
尚對交朋賒酒飲　尚ほ交朋の酒を賒して飲むに對し
徧看卿相借驢騎　徧く卿相の驢を借りて騎るを看る
誰怜所好還同我　誰か怜れまん　好む所　還た我と同じきを
韓柳文章李杜詩　韓柳の文章　李杜の詩

「贈朱嚴」（小畜集巻十）

ここでは、不遇の人生を送る朱嚴が自己と同じく「韓柳文章李杜詩」を好むと述べている。また質素な日常生活のなかの「妻」と「兒」の所為の描写は、杜甫「江村」詩（杜詩詳註巻九　中華書局　一九八九年第三版）の「老妻畫紙爲棋局、稚子敲針作釣鈎。」（老妻は紙に畫きて棋局を爲り、稚子は針を敲きて釣鈎を作る。）等も連想させるだろう。

この例および先に挙げた詩では、いずれも杜甫詩を愛読しているのは、左遷中の自分や科挙に及第できない友人といった、不遇な状態に置かれている者であり、不遇な人生を生きた杜甫の作品は、共感を寄せるにふさわしいものと感じられている。このように王禹偁の杜甫詩に対する評価には、不遇者の文学のイメージが伴っているのではないだろうか。

北宋初期における杜詩評としては、この他に、劉攽（一〇二二～一〇八八）『中山詩話』（歴代詩話　中華書局　一九八二年第二版）の記す、楊億（九七四～一〇二〇）の、「楊大年不喜杜工部詩、謂爲村夫子。（楊大年　杜工部の詩を喜ばず、謂ひて村夫子と爲す。）」がよく知られているだろう。これは、晩唐の李商隱らの纖細で華麗な詩風を理想とした西

崑派の、杜甫詩を洗練されない田舎びたものと捉える態度を端的に表すものと言えよう。北宋初期においては、王禹偁らのように杜甫詩を高く評価する人は存在していても、孤立した存在にとどまり、未だ大きな流れを形成するには至らなかったと思われる。

二　杜詩を読む官僚たち

では、この後の北宋仁宋期を中心とした時期に、杜甫詩はどのように読まれていたのだろうか。まず、沈括（一〇三一～一〇九五）『補筆談』巻下（稗海本）には、北宋仁宗期の官僚たちが杜甫詩を愛好していた様子が、次のように記されている。

宋景文子京判太常日、歐陽文忠公、刁景純同知禮院。景純喜交游、多所過從、到局或不下馬而去。一日退朝、道與子京相遇。子京謂之曰、「久不辱至寺、但聞走馬過門。」李邯鄲獻臣立談間、改杜子美贈鄭廣文詩嘲之曰、「景純過官舍、走馬不曾下。忽地退朝逢、便遭官長罵。多羅四十年、偶未識摩氊。賴有王宣慶、時時乞與錢。」葉道卿・王原叔各爲一體書、寫於一幅紙上。子京於其後題六字云、「効子美詠景純」。獻臣復注其下曰、「道卿御書、原叔古篆、子京題篇、獻臣小書。」歐公又以子美詩書於一綾扇上。高文荘在坐曰、「今日我獨無功。」乃取四公所書紙爲一小帖、懸於景純直舍而去。時西羌首領唃厮羅新歸附、摩氊乃其子也。王宣慶、大閹、求景純爲墓志、送錢三百千、故有摩氊・王宣慶之誚。今詩帖在景純之孫槩處、扇詩在楊次公家、皆一時名流雅謔。予皆曾借觀、筆跡可愛。

宋景文子京　太常を判する日、歐陽文忠公、刁景純　同に禮院を知す。景純　交游を喜び、過從する所多く、局に到るも或ひは馬より下りずして去る。一日　朝より退きて、道に子京と相ひ遇ふ。子京之に謂ひて曰く、久しく寺に至るを辱くせず、但だ馬を走らせて門に過ぐると聞くのみと。李邯鄲獻臣　立談の間に、杜子美の鄭廣文に贈る詩を改めて之を嘲して曰く、「景純　官舍に過ぐるに、馬を走らせて曾て下りず。忽地に朝より退きて逢ひ、便ち官長の罵りに遭ふ。多く羅ぬること四十年、偶たま未だ摩氊を識らず。賴むに王宣慶有り、時時　乞ふに錢を與ふ」と。葉道卿・王原叔　各おの一體の書を爲し、一幅紙の上に寫す。子京　其の後に於いて六字を題して云へらく、「子美の景純に詠するに効ふ」と。獻臣　復た其の下に注して曰く、「道卿の御書、原叔の古篆、子京の題篇、獻臣の小書」と。歐公　又た子美の詩を以て一綾扇の上に書す。高文荘坐に在りて曰く、「今日　我　獨り功無し」と。乃ち四公の書く所の紙を取りて一小帖を爲し、景純の直舍に懸けて去る。時に西羌の首領唃厮羅　新たに歸附し、摩氊は乃ち其の子なり。王宣慶、大閹にして、景純に墓志を爲るを求め、錢三百千を送る、故に摩氊・王宣慶の誚め有り。今　詩帖は景純の孫槩の處に在り、扇詩は楊次公の家に在り、皆な一時の名流の雅謔なり。予　皆な曾て借りて觀るに、筆跡　愛づるべし。

このエピソードは、宋祁（字子京　九九八～一〇六一）が判太常寺に在任し、歐陽脩（一〇〇七～一〇七二）と刁約（字景純　九九四～一〇七七）がともに禮院に在職していた時期のものだという。李燾『資治通鑑長編』巻一百二十五から一百三十四（中華書局本）ならびに歐陽脩の墓誌銘等に拠れば、宋祁が天章閣待制同判禮院となったのは、仁宗寶元二年（一〇三九）十一月のことであり、また歐陽脩は、翌康定元年（一〇四〇）六月に、權武成軍節度判官として在任していた滑州から召還さ

れ、館閣校勘に復帰して『崇文總目』の編修に参与し、十月には、太子中允に転じ、同修禮書となっている。その後、『崇文總目』は翌慶暦元年（一〇四一）の十二月に完成し、翌年（一〇四二）四月に、歐陽脩は同知禮院の命を受け、同年九月には、通判として滑州に転出している。両者の官歴から見て、このエピソードは、だいたい仁宗康定元年（一〇四〇）の後半から、慶暦二年（一〇四二）の前半にかけてのものと考えてよいだろう。なお、劉攽（一〇二三～一〇八九）『中山詩話』等にも、同じ話がより短い形で集録されている。

このエピソードの内容は、交際好きなために役所に出勤してもすぐに慌しく帰ってしまう刁約を、同僚たちが、杜甫の「戲簡鄭廣文虔、兼呈蘇司業源明」（戯れに鄭廣文虔に簡し、兼ねて蘇司業源明に呈す）詩をもじってからかう、というものである。なお、この『補筆談』巻下所収の本文では、改作詩の作者を李淑（字獻臣　一〇〇二～一〇五九）としているが、『中山詩話』（歴代詩話本）では、王洙（字、原叔　九九七～一〇五七）が戯れに「景純過官舍、走馬不曾下。驀地趁朝歸、便遭官長罵。」と改作したのを受けて、李淑が、「我爲に之に足さん」と言い、「多羅四十年、偶未識摩氊。（時西戎呥氏子名摩氊。）近有王宣政、時時與紙錢。（刁嘗爲王宣政作墓銘。）」と続けたことになっており、作者と詩句に異同が存在する。次に『杜詩詳註』巻三に拠って杜甫の原詩「戲簡鄭廣文虔、兼呈蘇司業源明」を示すが、改作詩がそのまま用いている語には○を付す。なお（○）は改作詩相互に異同があることを示している。

廣文至官舍	廣文　官舍に至るに
繫馬堂階下	馬を堂階の下に繫ぐ
醉則騎馬歸	醉へば則ち馬に騎りて歸り
頗遭官長罵	頗る官長の罵りに遭ふ
才名三十年	才名　三十年
坐客寒無氈	坐客　寒くして氈無し
賴有蘇司業	賴むに蘇司業有り
時時乞酒錢	時時に酒錢を乞ふ

一見すると明らかなように、改作詩の全四十字のうち十五から十八字は、原詩をそのまま用いており、上手に「改」作していると言ってよいだろう。また、一句目で原作の「至」（いたる）を「過」（たちよる）に、二句目で馬を「繫」（つなぐ）を「走」（はしらせる）にそれぞれ改めているのは、対比される意味を持つ動詞に置き換えることで、あえて原作の文意との間にずれを生じさせる面白さを狙ったものかと思われる。また末尾は、原作では、「蘇司業をあてにして時々酒代をもらおうとする」の意になるところだが、改作の『補筆談』の本文では、「王宣慶をあてにて時々金をもらおうとする」の意となって、刁約が王宣慶の墓誌銘を書いて報酬を得たことをあてこすることになる。またさらに『中山詩話』の本文の場合には、「近頃は王宣政がいて時々紙錢をくれるのだ」の意となり、故人である王宣政（王宣慶を指すか。）が亡者の金である紙錢をくれる、とさらにきつい皮肉を言っていることになる。

杜甫の原詩と改作詩とをこのように比較してみると、改作者たちが杜甫詩の用語と内容とをよく頭に入れていることがわかるが、そもそも集団の中で「替え歌」の享受が成り立つのは、「元歌」が既によく知られたものであるからこそのことであろう。つまり、このエピソードからは、このとき禮院に集っていた官僚たちの誰もが杜甫詩をよく読んでいたこと、さらにその知識が、仲間内での日常的な冗談のレベルで用いられるほど、彼らの間では当たり前のものとなっていたことを捉えることがで

きるだろう。

なお、このとき禮院に集っていた顔ぶれには、刁約・葉清臣（字道卿一〇〇〇～一〇四九）・高若訥（謚文莊　九九七～一〇五五）の他に、杜甫詩テクストの再編集において大きな役割を果たした王洙、ならびに、中唐期の韓愈らの文学の強い影響を受け、古文復興を継承し、かつ西崑体の流行を超えた新しい詩風を模索した歐陽脩といった、宋代の詩風形成に重要な影響を与えた人物が含まれている。また、ここでは判禮院として登場し、後に『新唐書』の編修の中心となる宋祁は、後世において詩の作者として評価されることはほとんどないが、その別集『景文集』には、「擬杜工部九成宮」（巻六）・「擬杜子美峽中意」（巻十七）を収めており、杜詩をよく読んでいたらしい。

さらに、北宋中期の官僚たちが杜甫詩を愛読していたことを示す資料として、世代は少し後になるが、韓維（一〇一七～一〇九八）「讀杜子美詩」（南陽集巻一　四庫全書本）を挙げてみよう。

寒燈熠熠宵漏長　寒燈　熠熠として　宵漏　長し
顛倒圖史形勞傷　圖史に顛倒して形は勞れ傷む
取觀杜詩盡累紙　取りて杜詩を觀て盡く紙を累ぬるに
坐覺神氣來洋洋　坐らにして覺ゆ　神氣　來たりて洋洋たるを
高言大義經比重　大義を高言して　經　重きを比べ
往往變化安能常　往往にして變化し安んぞ能く常ならんや
壯哉起我不暇寐　壯なるかな　我を起こして寐るに暇あらざらしめ
滿坐嘆息喧中堂　滿坐　嘆息して中堂に喧し
唐之詩人以百數　唐の詩人　百以て數へ
羅列衆制何煌煌　衆制を羅列すること何ぞ煌煌たる
太陽重光燭萬物　太陽　光を重ねて萬物を燭らせば
星宿安得舒其芒　星宿　安くんぞ其の芒を舒ぶるを得ん
讀之踴躍精膽張　之を讀むに　踴躍として精膽張り
徑欲追攝忘愚狂　徑ちに追攝せんと欲して愚狂を忘る
徘徊攬筆不得下　徘徊して筆を攬るも下すを得ず
元氣混浩神無方　元氣は混浩し　神は方無し

ここで韓維は、史館での史書編修の合間の休憩中に杜甫の詩を読み、その「神気」と、大義を言挙げすること、表現の多様性に引き込まれ、眠れなくなってしまったと言っている。さらにそれは彼だけではなく、同僚たちもまた、杜甫詩を読んで感嘆のため息をつき、騒がしく話しているという。この詩の詳しい制作時期は明らかではないが、韓維は英宗期に同修起居注となっているので、この頃制作されたものではないかと思われる。前出の王洙らによって再編集された杜甫の詩集は、この頃には史館の中にも持ち込まれて読まれていたようだ。この詩の内容は、先に見た禮院でのエピソードとともに、北宋中期において館閣で任に当たった文人官僚たちの間で杜甫詩が日常的に読まれていたことを示すものであり、またそこで杜甫詩を読んでいたのは、特に詩作に強い関心を示したり、後世において詩文の作者として評価されたりする人物だけはなく、その他の文人官僚たちをも含んでいたことを示している。

またこの詩のなかで韓維は、杜甫詩について、その他の数多くの唐代詩人たちを顔色なさしめるものであり、万物の根源の精気と精神の広がりを感じさせるものと評し、その詩人としての力量に脱帽し、自分の非力を痛感しているが、杜甫詩に対する同様の評は同時代の人物の詩文中にも見られるものであり、韓維のみに止まらない。

文物皇唐盛　文物　皇唐に盛んにして
詩家老杜豪　詩家　老杜豪たり

雅音還正始　雅音　正始に還り
感興出離騷　感興　離騷より出づ

張方平（一〇〇七～一〇九一）「讀杜工部詩」
（樂全集巻二　四庫全書本）

杜陵有窮老　杜陵　窮老有り
白頭惟苦吟　白頭　惟だ苦吟するのみ
正氣自天降　正氣　天より降り
至音感人深　至音　人を感ぜしむること深し

同「讀杜詩」（樂全集巻二）

ここでは、張方平から二例を挙げたが、「讀杜工部詩」では杜甫を禮樂・學術等の文化的制度が盛行した唐代における最も優れた詩人として位置づけ、さらにその源を、『毛詩』大序の「周南・召南、正始之道、王化之基。」（周南・召南は、正始の道、王化の基なり。）、及び『離騷』に求めている。また「讀杜詩」では、杜甫を、老年に至るまで困窮のなかで詩作したが、その詩作は万物のおおもとである元気を受けたものであり、その結果得られた優れた詩の響きは人を深く感動させたと述べている。いずれの評価も、韓維が記していたものとよく似ていると言えよう。

また韓維・張方平の他、趙抃（一〇〇八～一〇八四）「題杜子美書室」（清獻集巻三　四庫全書本）にも類似した表現を指摘することができる。

直將騷雅鎮澆淫　直に騷雅を將て澆淫を鎮め
瓊貝千章照古今　瓊貝千章　古今を照らす
天地不能籠大句　天地は大句を籠める能はず
鬼神無處辟幽吟　鬼神は幽吟を辟くる處無し
幾逃兵火羈危極　幾たびか兵火より逃れて危極に羈し
欲厚民生意思深　民生に厚からんと欲して意思深し
茅屋一間遺像在　茅屋　一間　遺像在り
有誰於世是知音　誰か世に於いて是れ知音有らんや

ここでもやはり杜甫を『楚辭』『詩』の正統を継承する古今随一の詩人と位置づけ、またその詩作が天地の機微に迫るものであること、及び生前の苦労に言及している。ここではさらに人民の福利への関心を挙げているが、このような諸点が当時の知識人たちにおける杜甫・杜詩に対する基本的な捉え方を示しているのではないかと思われる。

また、当時における杜甫像を捉える資料としては、当時編まれた唐朝の正史である『新唐書』（中華書局本）巻二百一「文藝傳上杜審言傳」に附された杜甫の伝記を挙げるべきだろう。この『新唐書』は、仁宗慶暦五年（一〇四五）に編修の詔が下され、嘉祐五年（一〇六〇）に完成に至ったものである。この杜甫の伝では、生涯の事跡を辿った後、杜甫の人となりと文学について次のように記している。

甫曠放不自檢、好論天下大事、高而不切。少與李白齊名、時號「李杜」。嘗從白及高適過汴州、酒酣登吹臺、慷慨懷古、人莫測也。數嘗寇亂、挺節無所汙、爲歌詩、傷時橈弱、情不忘君、人憐其忠云。

甫　曠放にして自ら檢せず、好みて天下の大事を論じ、高けれども切ならず。少くして李白と名を齊しくし、時に「李杜」と號す。嘗つて白及び高適に從ひて汴州に過ぎり、酒酣にして吹臺に登り、慷慨して古を懷ふに、人は測る莫きなり。數しば寇亂を嘗むるに、挺節して汙す所無く、歌詩を爲り、時の橈弱を傷み、情は君を忘れず、人は其の忠を憐れみて云ふ。

ここでは杜甫の人となりおよびその詩作について、三点を取り上げている。まず一つめは、杜甫が社会の重大事を論ずることを好んだが、そ

れは感情のままに言葉を放つものであり、それぞれの事柄について事細かに検討するといったものではなかったという点である。『新唐書』の傳部分の執筆を担当したのは宋祁とされているが、このような記述からは、宋祁が、杜甫を沈思黙考の人としてではなく、むしろ激情の人として捉えていることを示すだろう。また、二つめは、杜甫が生前から李白と併称される詩人であったことを述べ、李白も登場する吹臺でのエピソードを挙げている点である。このエピソードは、杜甫が自らの高潮した感情に浸る様子を描いており、すでに一つめに挙げた、激情の人としての性格を補強するものともなっていると思われる。

さらに三つめは、杜甫が騒乱の時代のなかで唐朝への忠誠を堅持し、時勢を嘆き、その思いを詩に表現して、人々に感銘を与えたという点である。杜甫の詩が、彼の生きた時代の困難な状況のもとでこそ生み出されたものであること、またその中にあって杜甫が唐朝への忠義を貫いたということは、先に見たその詩作に対する評価とともに、概ねこの後も杜甫のイメージとして継承されていくと思われる。

すでに見た韓維・張方平の詩では、唐代最高の詩人という評価をしていたが、では『新唐書』は、杜甫を唐詩の歴史のなかにどのように位置づけているのだろうか。杜甫伝の賛において、宋祁は杜甫の平生や人となりには言及せず、詩作を唐代の詩史のなかに位置づけることを試みている。

贊曰、唐興、詩人承陳・隋風流、浮靡相矜。至宋之問・沈佺期等、研揣聲音、浮切不差、而號「律詩」、競相襲沿。逮開元間、稍裁以雅正、然恃華者質反、好麗者壯違、人得一槩、皆自名所長。至甫、渾涵汪茫、千彙萬状、兼古今而有之、它人不足、甫乃厭餘、殘膏賸馥、沾丐後人多矣。故元稹謂、「詩人以來、未有如子美者。」甫又善陳時事、律切精深、至千言不少衰、世號「詩史」。昌黎韓愈於文章慎許可、至歌詩、獨推曰、「李杜文章在、光焰萬丈長。」誠可信云。

贊に曰く、唐興こり、詩人は陳・隋の風流を承け、浮靡にして相ひ矜る。宋之問・沈佺期等に至りて、聲音を研揣し、浮切　差はず、而して「律詩」と號し、競ひて相ひ襲沿す。開元の間に逮び、稍(やや)裁くに雅正を以てし、然して華を恃む者は質反き、麗を好む者は壯違ひ、人は一槩を得、皆な自ら長ずる所を名とす。甫に至りて、渾涵汪茫、千彙萬状、古今を兼ねて之を有ち、它人の足らざるところ、甫は乃ち餘すを厭ひ、殘膏賸馥、後人を沾丐すること多し。故に元稹謂へらく、「詩人以來、未だ子美の如き者有らず」と。甫は又た善く時事を陳べ、律切精深にして、千言に至るも少やも衰へざれば、世に「詩史」と號す。昌黎韓愈は文章に於いて許可するを慎むも、歌詩に至りては、獨り推して、「李杜の文章在り、光焰　萬丈長し」と曰ふのみ。誠に信ずべくして云ふ。

ここでは、まず杜甫以前の唐代詩史を、①唐初における陳・隋の華やかな詩風の継承、②宋之問・沈佺期による音律の研究と「律詩」の盛行、③玄宗開元年間における典雅・純正の追求という三つの段階に区分し、その上で第④の段階として、これらを含む古今の詩風を兼備した「集大成」者として杜甫を位置づけている。さらに杜甫以後の状況（第⑤段階）については、杜甫の影響の広がりを挙げ、その具体的な例として、元稹による高い評価、時事を題材とする長編詩に対する「詩史」としての評、古文の大家である韓愈による李杜詩への高い評価、の三点を挙げている。

すでに見たように、五代後晉期に編纂された『舊唐書』巻一百九十下文苑傳下の杜甫の傳では、杜甫詩を「盡く古今の體勢を得、而して人人の獨り專らにする所を兼ね」るものとして高く評価する元稹の「唐故工

部員外郎杜君墓係銘」序を、「李・杜之優劣」を論じるものとして引用しており、さらに、これ以後は元稹による高評が支持されたと言葉を添えていることから、五代後晉期においても杜甫詩に対する評価は高かったと思われるが、ここに挙げた『新唐書』杜甫傳賛の内容は、宋祁の杜詩評もまた、すでに見た韓維・張方平・趙抃の詩とともに、この『舊唐書』及び中唐期の元稹・韓愈らによる高い評価を継承していることを示しているだろう。

また、『新唐書』巻二百一文藝傳上の序において宋祁は、唐代文学史を①高祖・太宗期（初唐期）②玄宗期（盛唐期）③大暦・貞元期（中唐期。その後の時期については言及しない。）の三期に区分し、③の中唐期を「排逐百家、法度森嚴、抵轢晉・魏、上軋漢・周、唐之文完然爲一王法、此其極也。（百家を排逐し、法度は森嚴にして、晉・魏に抵轢し、上は漢・周を軋し、唐の文は完然にして一王法と爲る、此れ其の極みなり。）」を最盛期と位置づけている。さらに同じ序のなかでは、唐代において詩文に優れた人々を、「侍從酬奉」・「制册」・「言詩」・「譎怪」の四つの範疇に分けて示し、杜甫はそのうちの「言詩」に、李白・元稹・白居易・劉禹錫とともに挙げられているが、特に他から抜きん出ているとして絶賛されているわけではない。さらに宋祁は唐代の主要な詩文作者をカテゴリー化したこの部分を、「皆卓然以所長爲一世冠、其可尚已。」（皆な卓然として長ずる所を以て一世に冠爲り、其れ尚ぶべきのみ。）と収めており、名前を挙げた各々の人物を、それぞれの方面において優れていると評価するにとどまっている。

さらに、唐代の詩人各々の個性や長所を評価しようとする態度は、宋祁のこの「新唐書文藝傳序」以外にも、同時代の幾人かの文章のなかにも見ることができ、例えば歐陽脩（一〇〇七～一〇七二）は、「書梅聖俞稾後」（居士集巻七十三　四部叢刊本）のなかで、唐代に至るまでの詩の歴史を踏まえつつ、次のように述べている。

蓋詩者、樂之苗裔與。漢之蘇・李、魏之曹・劉、得其正始。宋齊而下、得其浮淫流佚。唐之時、子昂・李・杜・沈・宋・王維之徒、或得其淳古淡泊之聲、或得其舒和高暢之節、而孟郊・賈島之徒、又得其悲愁鬱堙之氣。由是而下、得者時有而不純焉。今聖俞亦得之。

蓋し詩なる者は、樂の苗裔か。漢の蘇・李、魏の曹・劉、其の正始を得。宋齊より而下、其の浮淫流佚を得。唐の時、子昂・李・杜・沈・宋・王維の徒、或ひは其の淳古淡泊の聲を得、或ひは其の舒和高暢節を得、而して孟郊・賈島の徒、又た其の悲愁鬱堙の氣を得。是より而下、得る者　時に有れども純ならず。今　聖俞　亦た之を得。

梅堯臣の詩文稿に寄せたこの文章では、漢・魏・宋齊・唐の各々の詩人が、古代の『樂』の後裔として、そのどのような面を継承しているかを列挙し、それらを総合的に継承する存在として位置づけることで、梅堯臣の詩作を高く評価していることを示そうとしている。歐陽脩が杜甫をあまり好まなかったことについては、劉攽『中山詩話』に言及があるが、ここでも杜甫だけを取り出して特別に評価することはしていない。

本章で見てきたように、北宋仁宗期の知識人たちの間においては、杜甫に対する『楚辭』『詩』の正統を継承する古今随一の詩人という位置づけは、すでにかなり安定していると思われる。また、生前の苦労・唐朝への忠誠・人民の福利への関心といった点からその人物像を形成し、天地の機微に迫るものとしてその詩作を捉えることも、かなり広く行われており、後世にまで継承される杜詩に対する基本的な捉え方はほぼ整っていると思われる。また、なかには歐陽脩のように、その詩をあまり好

まない人物もあるが、そのような人物においても、唐代の優れた詩人の一人としては認識されていたと考えてよいだろう。

三　「詩史」としての杜詩

ところで、先に挙げた『新唐書』文苑傳所収の杜甫の傳の賛に、「甫又善陳時事、律切精深、至千言不少衰、世號『詩史』。」（甫は又た善く時事を陳べ、律切精深にして、千言に至るも少やも衰へざれば、世に「詩史」と號す。）と述べたところがあったが、次に杜甫詩を「詩史」と呼ぶことについて、少し検討してみたい。

この「詩史」という語を、詩という形式を用いた歴史の記録という意味で用いた初出として、工具書等によく挙げられるのは、唐・孟棨『本事詩』高逸第三（歴代詩話續編　中華書局　一九八三年）の次の記述である。

杜逢禄山之難、流離隴蜀、畢陳於詩、推見至隱、殆無遺事、故當時號爲「詩史」。

杜　禄山の難に逢ひ、隴蜀を流離し、畢（つぶ）に詩に陳ぶるに、推して至隱を見し、殆んど遺事無し、故に當時　號して「詩史」と爲す。

もしもこの記述が「詩史」の初出であるならば、「詩史」という語は、当初から特に杜甫の詩を意識して造られた語ということになるだろう。また晩唐の人である孟棨が「當時」と言うのだから、杜甫の詩を「詩史」と評することは、杜甫の生前、あるいは少なくとも中・晩唐期に遡ると思われる。

その後、北宋中期以降の杜甫詩に対する評においては、この「詩史」の語を用いる例が増加しており、それらからは、当時において杜詩がどのようにとらえられていたかの一端を窺うことができる。先に見た『新唐書』巻二百一文藝傳の杜甫傳の贊では、『本事詩』の本文にあった「當時」という限定はなくなり、「世」、つまり世間一般で、という表現に変わっている。このような表現の変化は、杜甫の詩の属性として「詩史」を言うことが、この北宋中期においてもある程度広く行われていたことを示しているだろう。

例えば、劉攽『中山詩話』の、次に挙げるよく知られた章段では、「詩史」という語こそ用いてはいないものの、杜甫詩の表現の有する、詩という形式を用いた歴史の記録という性格が、史実を知るための資料として示された例を挙げている。

眞宗問近臣、「唐酒價幾何」莫能對。丁晉公獨曰、「斗直三百。」上問、「何以知之」曰、「臣觀杜甫詩『速須相就飲一斗、恰有三百青銅錢。』」亦一時之善對。

眞宗　近臣に「唐の酒價は幾何。」と問ふに、能く對ふる莫し。丁晉公　獨り、「斗直ひ三百」と曰ふのみ。上、「何を以て之を知るか」と問ふに、曰く、「臣　杜甫の詩の『速やかに須らく相ひ就きて一斗を飲むべし、恰も三百青銅錢有り。』を觀たり」と。亦た一時の善對なり。

これは、唐の酒の値段を近侍の臣下たちに問うた眞宗（在位九九七～一〇二二）に対して、丁謂（九六二～一〇三三）が、杜甫「偪側行贈畢四曜」（杜詩詳註巻六）の、「街頭酒價常苦貴、方外酒徒稀醉眠。速宜相就飲一斗、恰有三百青銅錢。」に拠って、「一斗が三百錢でございます」と答えたというものである。このエピソードがわざわざ記録されたのは、文学作品である詩の一節を史実の考証のための資料として用いる、という機転の面白さや意外性に対する興味によると思われる。しかし、この

詩句の内容が事実を記録したものとして丁謂の記憶に留められ、さらにこのエピソードが劉攽によって書き留められたことは、日常生活に取材して細かく描写しようとする傾向を持つ杜甫の詩が、読者である北宋の官僚たちにとって、他の文献には記録されていない唐代の社会や生活の状況を伝える資料となる可能性を持つと感じられたことを示しているだろう。

この『中山詩話』の記述は、すでに真宗期に丁謂が杜甫の詩に対して「詩史」的な捉え方をしていたことを示しているが、同様に杜甫の詩を唐代の史実を知るための資料として用いる例は、仁宗期を跨いだ、後の哲宗期（一〇八五～一一〇〇）頃に成立した資料にも見ることができ、それらは当時の知識人たちの間で、唐代の史実の詳細な部分への関心が高まっていたことを示している。次にその具体例として、龐元英（生卒年未詳。哲宗元祐三年（一〇八八）知晉州）『文昌雜録』巻五（學津討源本）の例を挙げてみよう。

杜甫爲左拾遺、作「紫宸殿退朝」詩云、「宮中每出歸東省、會送夔龍集鳳池。」東省、門下也、鸞臺在焉。鳳池在中書省。杜詩不應有誤、恐唐朝別有故事。又恐是時政事堂適在右省耳。

杜甫　左拾遺と爲り、「紫宸殿退朝」詩を作りて云へらく、「宮中より毎に出づるに東省に歸し、會（かならず）夔龍の鳳池に集ふを送る」と。東省は、門下なり、鸞臺は焉に在り。鳳池は中書省に在り。杜詩　應に誤り有るべからず、恐るらくは唐朝に別に故事有らん。又た恐るらくは是の時　政事堂は適（たま）たま右省に在りしのみ。

この例では、杜甫「紫宸殿退朝口號」（杜詩詳註巻六）の詩句を資料として、唐代の宮殿の植栽、庁舎の配置を考証し、詩句に記された庁舎の配置が通説とは異なるものであっても、「杜詩不應有誤、恐唐朝別有故事。」（杜詩　應に誤り有るべからず、恐るらくは唐朝に別に故事有らん。）と述べているので、著者の龐元英にとっては、杜甫の詩は事実を記録するということは、常識的な認識となっていたことを窺わせる。この他にも、例えば沈括が『夢溪筆談』巻二十四で、杜甫「塞蘆子」（杜詩詳註巻四）の表現を資料として、延州には天寶年間にすでに五つの城塞があったと考証している等、現存する筆記小説等のなかには、杜甫詩の詩句を史実の記録として捉えているものをいくつも指摘できるが、そのような事例が次第に増加していき、杜甫詩は詩による史実の記録であるという認識が、少しずつ固まっていったのではないかと思われる。

しかし、杜甫詩が史実の記録であるという認識に対して、全く疑問が差し挟まれないわけではない。それを表しているのが、次に挙げる成都武侯廟の柏樹をめぐる問題である。

武侯廟柏、其色若牙然、白而光澤、不復生枝葉矣。杜工部甫云、「黛色參天二千尺」、其言蓋過、今才十丈。古之詩人好大其事、率如此也。工部詩及段相國文昌記石龕於廟堂中。

（范鎮（一〇〇七～一〇八七）『東齋記事』巻四　中華書局　一九九七年第二版）

武侯廟の柏、其の色　牙然たるが若く、白くして光澤あり、復た生枝葉を生ぜず。杜工部甫云へらく、「黛色　天に參ずること二千尺」と、其の言は蓋し過ぎたり、今才かに十丈なるのみ。古の詩人　其の事を大にするを好み、率ね此くの如きなり。工部の詩及び段相國文昌の記の石龕　廟堂中に於いてあり。

杜甫「武侯廟柏」詩云、「霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺。」四十圍乃是徑七尺、無乃太細長乎。防風氏身廣九畝、長三丈。姫室畝廣

六尺、九畝乃五丈四尺、如此、防風之身乃一餅餤耳。此亦文章之病也。

（沈括（一〇三一～一〇九五）『夢溪筆談』巻二十三　四部叢刊本）

杜甫「武侯廟柏」詩に云へらく、「霜皮　雨を溜めて四十圍、黛色天に參ずること二千尺」と。四十圍は乃ち是れ徑七尺なり、乃ち太だ細長なること無からんや。防風氏身は廣きこと九畝、長きこと三丈なり。姫室　畝は廣きこと六尺、九畝ならば乃ち五丈四尺なり、此くの如く、防風の身は乃ち一餅餤なるのみ。此れ亦た文章の病なり。

これらにおいては、成都武侯廟の柏樹に寄せた杜甫「古柏行」（杜詩詳註巻十五）の詩句の表現が、大げさな表現と捉えられている。事実を記録する「詩史」と評される杜甫の詩にも誇張が見られるということを珍しいものとして取り上げたものかと思われるが、さらに王得臣（一〇三六～一一一五？）『麈史』巻中「辨誤」（上海古籍出版社　一九八六年）では、沈括らの言葉を踏まえ、この詩句の表現と「詩史」という属性との齟齬の解決を求めて、次のような検討を行っている。

凡言木之巨細者、始曰拱把、大曰圍、引而増之曰合抱。蓋拱把之間、纔數寸耳。圍則尺也。合抱則五尺也。『莊子』曰、「櫟社木、其大蔽牛、挈之百圍。」疏云、「以繩束之、圍麤百尺。」是也。今人以兩手指合而環之、適周一尺。杜子美「武侯廟柏」詩云、「霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺。」是大四丈。沈存中内翰云、「四十圍乃是徑七尺、無乃太細長也。」然沈精於算數者、不知何法以準之。若徑七尺、則圍當二丈一尺。傳曰、「孔子身大十圍。」夫以其大也、故記之。如沈之言、纔今之三尺七寸有畸耳、何足以爲異邪、周之尺、當今之七寸五分。

凡そ木の巨細を言へば、始めを拱把と曰ひ、大なるを圍と曰ひ、引きて之を増すを合抱と曰ふ。蓋し拱把の間は、纔かに數寸なるのみ。圍なれば則ち尺なり。合抱なれば則ち五尺ならん。『莊子』に曰く、「櫟社の木、其の大なること牛を蔽ひ、之を挈すること百圍なり」と。疏に云く、「繩を以て之を束ぬるに、圍は麤（ほぼ）百尺なり」と。是れなり。今人兩手の指を合して之を環るに、適たま周一尺なり。杜子美「武侯廟柏」詩に云へらく、「霜皮　雨を溜めて四十圍、黛色天にずること二千尺」と。是れ大なること四丈なり。沈存中内翰云へらく、「四十圍は乃ち是れ徑七尺なり、乃ち太だ細長なること無からんや」と。然るに沈の算數に精しき者なるも、何に法りて以て之を準ふるかを知らず。若し徑七尺なれば、則ち圍は當に二丈一尺なるべし。傳に曰く、「孔子は身の大なること十圍なり」と。夫れ其の大なるを以てなり、故に之を記す。沈の言の如くならば、纔かに今の三尺七寸の畸有るのみ、何ぞ以て異と爲すに足らんや、周の尺は、當に今の七寸五分なるべし。

ここでは、通常ならば事実を記録する「詩史」として評される杜甫の詩において、現実と齟齬する表現が存在していることを問題とし、長さの単位を調整することによってその解決をはかろうとしている。王得臣にとっては、杜甫詩は事実を記録しているという認識は揺らぎの無いものであり、一見して事実と合致しないようであっても、それには特別の理由（この場合には長さの単位の変化）があり、結果的には事実と齟齬しないはずだと考えている。蘇軾（一〇三六～一一〇一）と同じ年の生まれである王得臣の世代に至ると、杜甫詩＝「詩史」という関係は既に

自明のこととされ、その表現は文学的な空想や誇張を含まず、必ず歴史的事実を反映するものと認識されていることが窺われる。

このように、「詩史」という評を与えることは、杜甫の詩が本来有している様々な性格のなかから、特にそのひとつに着目したものと言うことができようが、この「詩史」という捉え方がある程度の広がりを持ちえた背景には、杜甫詩のテクストに対する考証が重ねられ精密さが追及されるなかで、史実との関係に注意が向けられることになったという事情が存在しているだろう。さらに、より広範な背景としては、別集の編年化という現象に顕著な、この時期における時間系列に添ってものごとを整理しようとする志向の強まり、またそのような思考とおなじ思潮のなかにある史学の盛行という状況が関わっているのではないだろうか。さらに言うならば、本稿ですでに名前を挙げた人物を含めて、杜甫の詩を読んでいた知識人たちのなかには当時、史書の編纂に携わった人物が数多く含まれており、「詩史」という捉えかたは、読み手の側の歴史への関心の強さを反映したものと考えることもできるのではないだろうか。

四　テクストの整備と読みの精密化

既に挙げた五代後晉期に編まれた『舊唐書』巻一百九十下文苑傳下所収の杜甫の伝に、「甫有文集六十。」と記されていた杜甫の別集は、晩唐・五代の動乱を経過するなかで過半が散逸し、北宋初期においては、その一部を見ることができるにとどまっていたと考えられる。仁宗期に王堯臣等によって編まれた『崇文總目』巻五別集類に挙げられているのは、「杜甫集二十巻」（撰・編者名なし）と「杜工部小集六巻　杜甫撰　樊晃集」のみであり、その他に大部な杜甫の別集等はない。

しかし既に見たように、北宋初期においても杜甫詩に対してはある程度高い評価が与えられており、そこで、より完全なテクストを求めて、仁宗期を中心とした北宋中期に、その作品の収集と整理が盛んに行われることになったと考えてよいだろう。北宋中期における作品の収集と整理の状況については、これまでに様々な検討が進められており、拙稿「王安石の詩における唐詩の受容について」二　杜詩テクストの整理と杜詩の学習（三重大学人文学部文化学科『人文論叢』第二〇号　二〇〇三年三月）でも、王安石の場合と関わって言及したことがあるので、ここでは詳しくは繰り返さないが、蘇舜欽（一〇〇八～一〇四九）「題杜子美別集後」（蘇學士文集巻十三）・王洙（九九七～一〇五七）「分門集注杜工部詩序」（分門集注杜工部詩巻首）・王琪（生卒年未詳。治平二年（一〇六五）知揚州。）「後記」（同）等の資料から、仁宗期を中心とした時期に、民間に散逸していた作品が次第に収集され、全二十巻（詩十八巻・文二巻）の繫年テクストが編集され、それが補訂を経て版本化されていった状況を捉えることができる。

このような杜詩の収集と整理の努力が重ねられた結果、杜甫詩に対する読みは、次第に精密化していったと考えられ、例えば、杜甫詩の再編集に関わった人物のひとりであり、先に見た禮院のエピソードにも登場した王洙の言葉を記録した『王氏談叢』（明・陶宗儀等編『説郛』宛委山房本弓二十四　上海古籍出版社　一九八九年第二版）「詩話」には、杜甫詩に関わるいくつかの記述を見ることができるが、それらからは、彼が杜甫詩を整理する様子を窺うことができる。

公言、近人別傳杜甫詩「杜鵑行」一篇云、「誰言養雛不自哺、此語亦足爲愚蒙」。此正破前篇、非甫作也。

公言へらく、近人　別に杜甫詩「杜鵑行」一篇を傳ふるに云く、

「誰か言はん雛を養ふに自ら哺せざると、此の語　亦た愚蒙と爲すに足る」と。此れ正に前篇を破れば、甫の作に非ざるなり。

ここで王洙は、流布しているテクストとは別に近ごろの人が伝えている杜甫「杜鵑行」に、「誰言養雛不自哺、此語亦足爲愚蒙。」とあるが、これは前の作品（未詳。ただし『文苑英華』巻三百四十五では直前に杜甫「杜鵑行」（君不見昔日蜀天子、～）を掲載しており、王洙がこのテクストを意識していると考えれば、話のつじつまが合う。）を損なうものなので杜甫の作ではないと述べている。なお、宋初に編纂された『文苑英華』では、この詩を司空曙作として巻三百四十五「謌行」に収め（作者名の下に「又見杜甫集」と注す）、現行本の『九家集註杜詩』にはこの詩句を含む「杜鵑行」は収録されていない。また『杜詩詳註』巻九には当該句を異同なく含む「杜鵑行」テクストを収めている。

また王洙は書物の校勘に関わって、次のようにも述べている。

公言、校書之例、它本有語異而意通者、不取可惜。蓋不可決、謂非昔人之意、俱當存之、注爲「一云、作壹。」（一字已上謂之「一云」、一字謂之「一作」。）公自校杜甫詩有「艸閣臨無地」之句、它本又爲荒蕪之「蕪」、既兩字之。它日有人曰、「爲『無』字以爲無義。」公笑曰、「『文選』云、『飛閣下臨于無地。』豈爲『無』義乎。」

（『同』校書）

公言へらく、校書の例、它本に語異なりて意通ずる者有れば、取らざるは惜しむべし。蓋し決するべからず、昔人の意に非ざると謂へば、俱に當に之を存し、注して「一に云く、壹と作る」と爲すべし。（一字已上は之を「一に云く」と謂ひ、一字は之を「一に作る」と謂ふ。）公　自ら杜甫詩を校するに「艸閣臨無地」の句有り、它本に又た荒蕪の「蕪」と爲し、既に之を兩字にす。它日　人有りて曰く、「『無』字と爲し以て無の義と爲す」と。公笑ひて曰く、「『文選』に云へらく、『飛閣　下のかた無地に臨む』と。豈に『無』の義と爲さんや」と。

王洙はここで、書物校勘の際の原則として、他本に語が異なり意味が通じる異同があり、いずれにも決し難く、作者の意図が測りがたい場合は、両方を保存して、「一に云く、壹と作る」と注すべしと述べている。さらに具体例として、杜甫「草閣」詩（杜詩詳註巻十七）「草閣臨無地、柴扉永不關。魚龍迴夜水、星月動秋山。久露晴初濕、高雲薄未還。泛舟慚小婦、飄泊損紅顏。」の冒頭、「草閣臨無地」の句を挙げ、「無」と「蕪」の二種の本文が存在したと述べている。

現行王洙本のこの部分は「蕪」だが、郭知達『九家集注杜詩』巻三十所収のテクスト以下、仇兆鰲注『杜詩詳註』巻十七・錢謙益『杜工部集註』巻十五とも「無」としており、いずれも『文選』（巻五十九）所収の、王巾「頭陀寺碑文」「亙丘被陵、因高就遠。層軒延袤、上出雲霓。飛閣逶迤、下臨無地。…」を典拠として挙げている。この章段は王洙がテクストの校勘の問題について述べたものだが、校勘の精確さを追及するなかでは、この杜詩の例のように、詩句の表現の典拠にまで遡った検討が必要となる場合もあったと思われる。さらにそのような検討が重ねられていくなかで、それぞれの判断の基づくところとなった資料が書き記されていけば、おのずからそれは注釈に近いものになっていったのではないだろうか。

王洙が杜甫詩に注釈をつけたか否かについて、例えば南宋の晁公武は『郡齋讀書志』巻十七（孫猛校證『郡齋讀書志校證』巻十七　上海古籍出版社　一九九〇年）の「杜甫集二十巻　集外詩一巻　注杜詩二十巻　蔡興宗編杜詩二十巻　趙次公注杜詩五十九巻」で、王洙以降いくつかの

杜甫詩注が編まれたが、それらの質はよいとは言えず、王洙注とされるものは偽りであると考えている。当時、単行の王洙注が存在していたのかどうかは簡単に判断することができないが、北宋中期から南宋期にかけての杜甫詩注を集成した南宋・郭知達編の『九家集注杜詩』三十六巻（四庫全書本）の「九家」の中には、王安石・宋祁・黄庭堅・薛夢符・杜時可・鮑彪・師民瞻・趙彦材とともに、王洙が名を連ねており、単行の注釈が存在したか、あるいはテクスト校勘の資料として記されたものが注釈として扱われるようになった可能性もあるのではないかと思われる。

また、杜甫詩の典故についての検討は、王洙以外の人物の筆記等にも見ることができる。少し後の世代の王得臣『麈史』巻中「詩話」の例を挙げてみよう。

『荘子』曰、「鵬之徙南溟也、搏扶搖而上者九萬里、去以六月息者也。」『爾雅』釋風、「上下曰扶搖。」老杜「下峽」詩曰、「五雲高太甲、六月曠搏扶。」恐別有出。

『荘子』曰く、「鵬の南溟に徙るや、扶搖を搏ちて上る者九萬里、去るに六月の息を以てする者なり」と。『爾雅』釋風に、「上下するを扶搖と曰ふ」と。老杜の「下峽」詩に曰く、「五雲　太甲を高くし、六月　搏扶を曠くす」と。恐るらくは別に出づるところ有らん。

ここでは杜甫「下峽」詩（「大暦三年春白帝城放船出瞿唐峽久居夔府將適江陵漂泊有詩凡四十韻」（杜詩詳註巻二十一））の、

伊呂終難降　伊呂　終に降りること難く
韓彭不易呼　韓彭　呼ぶこと易からず
五雲高太甲　五雲　太甲を高くし
六月曠搏扶　六月　搏扶を曠くす

の最終句の典拠について考え、王得臣は『荘子』逍遥遊篇冒頭の、よく知られた鵬の「將徙於南溟。」と、『爾雅』釋風（正しくは釋天「扶搖謂之猋。（扶搖　之を猋と謂ふ。）」及びその郭璞注「暴風從下上。（暴風下より上る。）」）を挙げ、この他に基づくところがあるのではと疑問を呈している。この句の典拠について、『九家注』巻三十三は『荘子』逍遥遊を挙げて続く句との関係から他の典拠を検討し、『杜詩詳註』は、上句に朱註として京房『易候』等を、下句に『荘子』を引き、さらに、「按、『五雲高太甲』、注家凡數説…」と述べている。『麈史』の本章段は、この句の典拠の様々な検討の一端を示したものであろう。

このように、北宋仁宋期を中心とした時期に王洙らによって杜甫詩のテクストが再編集された際、より精確なテクストを求めて各テクスト間の校勘や表現の典拠等の検討が進められる過程で、その検討の内容や資料の記録が次第に蓄積されていったと想像される。それらはまとまった注釈とは呼べないにしても、杜甫詩注の始原のようなものとして位置づけることができるだろう。また、複数の人物の手になるそれら個別の、なかには断片的なものも含まれる注釈的記述のなかには、すでに失われたものも多いと思われるが、そのうちの保存されたものが、南宋期になって『九家注』やあるいは『千家注』の等の注釈書のなかに取り込まれ、後世にまで伝わっていくことになったのではないかと思われる。

最後に、同じ『麈史』巻中「詩話」から、もう一例を挙げておきたい。

古善詩者、善用人語、渾然若己出、唯李杜。顔延年「赭白馬賦」曰、「旦刷幽燕、夕秣荊越。」子美「驄馬行」、「晝洗須騰涇渭深、夕趨可刷幽并夜。」太白「天馬歌」曰、「鷄鳴刷燕晡秣越。」皆出於顔賦也。退之曰、「李杜文章在、光焰萬丈長。」信哉。

古の詩を善くする者の、善く人語を用ひて、渾然として己より出づ

るが若きは、唯だ李杜のみ。顔延年「赭白馬賦」に曰く、「旦に幽燕に刷き、夕べに荊越に秣ふ」と。子美「驄馬行」に、「晝に洗ふに　須らく涇渭の深きに騰るべく、夕べに趨るに　幽并の夜に刷すべし」と。太白「天馬歌」に曰く、「鶏鳴　燕に刷き　晡に越に秣ふ」と。皆な顔の賦より出づるなり。退之曰く、「李杜　文章在り、光焰　萬丈に長し」と。信なるかな。

ここでは過去の詩人のうち、巧みに先人の詩語を用いながらも、ひとつにとけ合って自分の創出であるかのようなのは、ただ李白と杜甫のみであると、李白・杜甫を非常に高く評価している。さらにその実例として顔延年「赭白馬賦」（文選巻十四）を踏まえる、杜甫「驄馬行」（杜詩詳註巻四）、李白「天馬歌」（李太白全集巻三）を挙げ、加えて中唐期の韓愈の彼らに対する高い評価を示す、「調張籍」（韓昌黎詩繫年集釋巻九）を引用して、これに同意を示している。王得臣がここで示している「巧みに先人の詩語を用いながらも、ひとつにとけ合って自分の創出であるかのよう」に詩句を制作するという考え方は、少し後の江西詩派の「点鐵成金」「換骨奪胎」を想起させるものだが、王得臣はこの手法に秀でた過去の詩人として、李白・杜甫を挙げている。ここには李白・杜甫に対する評価の高まりと、後の江西詩派への流れを指摘することもできるのではないだろうか。